
涼宮ハルヒちゃんのぬいぐるみ続編・宇宙から来たペンギン

571レノにいさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涼宮ハルヒちゃんのぬいぐるみ続編・宇宙から来たペンギン

【Nコード】

N4288R

【作者名】

571レノいさん

【あらすじ】

ある日あるとき、宇宙からやってきたそれほど緊迫感のない来訪者。

シッコミに忙しいキョン君、さらに多忙に。

(本作はmixiに投稿したものの転載です。)

宇宙から来たペンギン1 (前書き)

本作は「涼宮ハルヒちゃん」基調となります。

宇宙から来たペンギン1

ある日、俺は長門の家に招かれた。行ってみると・・・ペンギンがいた。成鳥二羽、幼鳥一羽。よちよちと動き回ったり、じつと佇んだりしている。・・・あの、長門さん？ この方々はいつたい・・・？ 長門が答える。

「紹介する。こちらは地球外生命体である『ペンギルリン星人』の皆さんである。ペンギルリン星人は涼宮ハルヒ観測業界において、無視できぬ地位を占める知的生命体である。」

あるのそんな業界?!・・・産業として成立しているとは知らなかった。と、なかの一羽がよちよちと近寄ってきた。

「クエー。クエー。クエツ。」

長門が答える。

「そう。」

「クツクエツ。クエツ。クエー。」

「そう。」

あの、長門さん、お話し中失礼ですが、・・・なんのお話しを？

「これを。」

そう言つと長門はひと昔前のポータブルCDプレイヤーのようなものを取り出した。イヤホンがついている。そいつを耳にセットすると、あの「鳴き声」が翻訳されて聞こえた。

「クエー。クエー。クエー。（すると長門さん、このお方が、あの・・・?）」

「そう。」

「クエツ。クエー。クエツ！クエツ。クックエツクエツ！（キヨンさん！お会いできて光栄です！ペンギルリン星を代表いたしましてご挨拶を！）」

まどろっこしいので、この後は翻訳のみ記すことにする。あたり
にいたもう二羽も近寄ってきて、さかんに話し始める。

「お父さん（義理）！この方があの？」

「息子（義理）よ、その通りである。この方こそはかの！」

「お父ちゃん（義理）、このひとつが？」

「おお、下の息子（義理）よ、その通りだ！」

「お会いできて光栄です！」

「あいたかったでしゅ！」

「お父さん（義理）！輝かしいこの日を、大いに記念すべきではないでしょうか！」

「息子（義理）よ！私もそう思っておったのだ！」

「きねん！」

・・・なんだかやたらに熱烈歓迎されていて照れる。・・・あの、
いやその・・・恐れ入ります・・・。

「お父さん（義理）！お父さん（義理）！この方は大変よいかたです！僕にはわかるんです！」

「おお、息子（義理）よ！私もいま全く同じことを考えておったのだ！」

「いいひとつ！」

「お父さん（義理）！」

「息子（義理）！」

「お父ちゃん（義理）！」

そして三羽は一箇所にかたまる。ひしと抱き合っているような感じなのだろうが、いかんせんペンギンなので、なんとなくあの羽根をはたはたさせながら群れているようにしか見えない。・・・それにしても、その、（義理）、っていうのは、必ず必要なものなので
すか・・・？

宇宙から来たペンギン2

「われわれは仲がよいのです!」

お父さんペンギンが叫ぶ。

「あまりに仲がよくて、時折自分たちの真の関係を忘れ去ってしまいがちになるので、あえて日々強調しているのです!」

・・・はあ、そうですか。よくわからんが、たぶん、この人たちにはそれは重要なポイントなんだろうな。さて、この「ペンギンそっくり宇宙人一家(義理)」は、実は普通のペンギンとは少し違う、ある特徴がある。頭が大きいのだ。ペンギンの写真など参照できたらしていただきたい。通常ペンギンは肩にあたるあたりから頭にかけて急に細くなり、意外なほど頭が小さいものだ。この人たちは肩から上の細くなりかたが普通より少なく、従って頭がそのぶん大きい。目も嘴もそれに対応してかなり大きい。おかげで普通のペンギンよりさらにずんぐりむっくりした感じになっており、なんとというか、「ペンギン感」とでもいおうか、要するにペンギンらしさがより強調される外見をしている。さて、俺はなんとなくコタツに入り、しまったな、この季節にはちょっと暑いかな、などと思っているとペンギンさんたちがよちよちと近寄ってきて、俺にぴたりと密着するのであった。この人たちは体温が高いようである。非常にぬくい、というよりは、暑い! はるばるとやってきた他星からの来訪者諸兄を払いのけるわけにもいかず、まず意図がわからず、俺はのぼせそうになりながら呆然としていた。そこに熱いお茶とともに長門登場。三人のペンギン宇宙人に取り囲まれてひたすら暖められている俺を見て、

「おお・・・！」

と感嘆。そして熱いお茶。いかん。・・・茹だる・・・ふと見ると、三人の宇宙人さんは目を閉じてすうすうと寝息。ううむ、さらに払いのけにくくなった！ そのまま暫し。熱いお茶を飲みながらコタツとペンギンさんたちに散々に暖め倒され、俺は完全に茹だってしまった。と、ペンギン宇宙人さんがふと目をあける。そして、

「ふふふ。ごゆっくり」

などと言って、よちよちと立ち去っていくのであった。体温の上がりまくった俺には、暖房下の室内でも涼しさを感じる。やれやれ、生還した！ 長門がやってきて座る。なあ、今のはいったいなんだっただんだ？

「ペンギルリン一族の最高の歓待の表現。彼らは、お客様を暖めることが最大級の歓迎。それも、自らの体温で暖めること。これは『あなたはこれだけ無防備に接近しても安心できる人です』という意味もある。また、ちよつと眠ってみせることも彼らにとつては重要。『あなたに対しては完全に無防備です』という意味。そして、必ず熱い飲み物でもてなすこと。彼らペンギルリン一族は、水分を食物に含有される分量だけで摂取を完結させられるよう進化してきたため、飲料は完全な嗜好品。よって、おもてなしには熱い飲料でなければならない。冷たい飲料はある種の悪意のある表現とみなされる。逆さに立てた箸、上がり框から半分ずり落とした座布団、玄関で勧めるお茶漬け、そういったものに相当。私も彼らのホストとして、彼らの歓待に協力しないわけにはいかなかった。私が冷たい飲み物をあなたに供することは、彼らの歓待に大いに水を差し、彼らの怒りを買う行い」

あの人たちは怒らすと恐いのか？

「別に恐くはないが、かなりしつこく拗ねて黙り込んでしまうので非常に面倒くさい」

ふうむ、意外に難儀な方々だ。しかし思わぬ場所とんだ異文化交流であることだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4288r/>

涼宮ハルヒちゃんのぬいぐるみ続編・宇宙から来たペンギン

2011年12月14日00時50分発行